

D. H. LAWRENCE : 小説に現われた女性(その1)

生い立ちと SONS AND LOVERS を中心に

石 田 美 栄

I

ジョン・アーサー(John Arthur)は7才から炭坑で働き出した生粋の炭坑夫であった。よい声をして酒を好み、よく歌をうたった。リディア・ベアズオール (Lydia Beardsall) は清教徒風な宗教心を持ち、教育もあり、教師をしたこともあった程だった。そのリディアには恋人があったが、その青年が小学校の教師となり、金持の未亡人と結婚してしまった。この失恋の後に彼女はあるダンスパーティでアーサーと出会い、ダンスの巧い、陽気で体格の立派な坑夫がリディアの心をとらえてしまい、1875年12月に二人は結婚したのだった。結婚後一年足らずはよかったのであるが、やがて二人の間の溝はどうにもならないものとなり、家庭はいつも不安と喧騒の中にあった。デビッド・ハーバート・ロレンス (David Herbert Lawrence) はこうした運命の家庭に1885年二人の兄、一人の姉の下に四番目の子として、英国ノッティンガムにある炭坑町イーストウッドに生れた。

ロレンスは義務制の小学校を終えると、奨学金を得てノッティンガム・ハイスクールに通い、その後外科医療器具店に勤務。この頃1906年の夏初恋の女ジェシー (Jessie Chambers) と知り合った。その後病気のため退職し、回復後はイーストウッドの助教師となり、1903年イルケストン教員養成所に通い、1906年ノッティンガム大学師範部に入学、卒業後クロイドンの学校に勤務した。1910年、夫への不満から、その愛のすべてを息子に注いだ母は癌のため死亡。1911年ロレンスは再び肺炎に罹って学校を退き、これが勤めの最後となった。

ジェシーの感化のもとに20才で詩作を始め、大学にいた頃には既に最初の長篇小説「白孔雀」(The White Peacock)を書き出していた。そしてこれ以後数多くの詩、小説「背律者」(The Trespasser)を書き、1912年、かつての恩師、大学教授の妻、既に三人の子供を持つドイツ貴族出身のフリーダ (Frieda) との駈落。1912年9月には、過去の総決算と言うべき長篇小説「息子と恋人」(Sons and Lovers)を完成。これらの作家としての時期を第一期と呼ぶことが出来る。その後フリーダとの恋愛を通して新しい時期にはいり、「虹」(The Rainbow)、「恋する女たち」(The Women in Love)等を書きあげて、1919年第一次世界大戦が終り、やっと出国を許されて、英国を出る迄を第二期。此の間1914年フリーダと正式に結婚している。

1919年秋に英国を去ったロレンスは、イタリー、インド、オーストラリア、アメリカと放浪、1925年に帰国する迄の時期を第三期。「アロンの杖」(Aaron's Rod)、「カンガルー」(Kangaroo)、「翼ある蛇」(The Plumed Serpent)の三つの長篇小説をはじめ、「きつね」(The Fox)、「大尉の人形」(The Captain's Doll)、「てんとう虫」(The Ladybird)

などの中篇と、作家として最も多産な時代であった。

1925年アメリカを後にして英国に戻り、1930年南フランスで結核のためこの世を去る迄の最後の時期。メキシコで重態に落入ってから、一時は回復したけれども、その後絶えず死の淵にあったロレンスは、この時期に「死んだ男」(The Man Who Died), そして最も世界を騒がせた「チャタレー夫人の恋人」(The Lady Chatterley's Lover) 等を書いた。

II

……彼は10才にしてすでに母の異状な愛のうちに包まれていた。……ロレンス程女に対して多くを要求し、かつ、気むずかしかった男は少ない。……しかも彼のあらゆる行動と思想の底には女性がある。¹

そして又ロレンス最初の小説 The White Peacock が出た時には、余りに女性が良く書けているので、女性の作者と間違われた程だった。それではそのロレンス自身の女性関係は、実際にはどうだったのであろうか。

無知で酒好きな坑夫と、禁酒主義者の教師との結婚。結婚に夢破れた母親はその愛を次兄ウィリアムに注いだ。“……he was the pride of my mothor's”² と妹のエイダ(Ada) が述べている様に、ウィリアムは学業優秀で、タイプ、速記を習い、仏語、独語ができ、ロンドンの船会社で書記をしていた。その前途有望なウィリアムが肺炎と丹毒で急死した時、母親の失望は大変なものだった。しかしロレンス自身がその後肺炎に罹り、母親は必死に息子を看病した。その看病を通して、それ迄ウィリアムに注いでいた愛情を代ってロレンスに注ぐようになった。

ロレンスの青年期を取巻く女性は他に初恋の女であり、ロレンスを作家にさせたと言える、近くの農場に住んでいた Jessie。イルケストンの学校での教師 Louie Burrows。Croydon での教師で、ロレンスが The Trespasser を書く切掛けになった Helen Corke。他に “At Croydon, besides Helen Corke, there were apparently three other women he was involved with”³ と Moore が書いている様に、即ち “Agness Holt, Jane, and Mrs. Davidson” 等であった。此れら三人の女性の内 Agness Holt については、ロレンスは結婚する積りでいたとか、そうではなかったとか言われている。Jane, Mrs. Davidson については詳しい事は不明であるが Moore は次の様に述べている。

Hopkin once advertently heard a married woman tell Mrs. Hopkin :
“Sallie, I gave Bert sex. I had to. He was over at our house, struggling with a poem he couldn't finish, so I took him upstairs and gave him sex. He came downstairs and finished the poem.”⁴

初恋のジェシーとの交際はずっと続いてはいたのであるが、母親の介入によって異様な歪曲を受けることになり、ジェシー自身 “Bert belongs to his mother. She'll never gave him up”⁵ と言い、ロレンスも “Lawrence told Jessie…… that he had always loved his mother 'like a lover. That's why I could never love you.’”⁶ とある様に、母親の生きている限りは、どうしても本当の恋愛はできなかったのである。

こうした中であって、1909年まだ母親の生存中に、ジェシーに相談しながら書き上げた最初の長篇小説 The White Peacock には、ロレンスの周囲の人々をモデルにしたと考えられる多くの人物が登場する。しかしロレンスの生い立ちに於て重要であるべき人物は、此の小説の中ではすべて存在が薄く、表面には出てこない。まだ母親の強い支配下にあったロレンスは、自分の生い立ち、青春に真正面からぶつかることができなかつたのである。従つて炭坑町の暗さよりも、田園、自然の美しさを描き、登場人物を実際からは労働者階級に置くべきところを、母親が息子達に望んだであろう豊かな中産階級、知識階級に置き、どうしてもその中に入れることのできなかつた父親に当る人物は、別居してゐて実際には全く登場せず、初めの方で死んだことにしてしまつてゐる。ロレンスとジェシーに当るシリル (Cyril) とエミリー (Emily) の関係は此処では影が薄く、此の二人の関係については、後の小説 Sons and Lovers に待たなければならぬ。しかし The White Peacock には、後になって色々な作品の中で重要な主題として扱われるようになって来る物の多くの萌芽を見ることができる。

ロレンスの第二の長篇小説「背律者」(The Trespasser) については、「天才の駄作」と評されたこともあるごとく、元々 Helen Corke が友人の事件を題材にして書いていた Neutral Ground から取つて書いたもので、最初 The Saga of Siegmund と言ひ、ヴァイオリニストである主人公シーグモンドが、家庭を棄て、恋人ヘレナ (Helena) と五日間の夢の様な情熱的生活を送り、その後生きる気力を失ひ自殺するのである。この恋人ヘレナに、後に出てくる自分の意志を押しつけようとする女性のタイプが見られる他は、ロレンス一連の小説の中では異質の作品と考えることができる。

註

1. 土居光知, 佐治秀寿註釈. Sons and Lovers, Tokyo, Kenkyusha, 1968, Introduction ix.
2. Ada Lawrence & G. Stuart Gelder, Young Lorenzo, Early Life of D. H. Lawrence, Tokyo, Asahi Press, 1968, p. 16.
3. Harry T. Moore, The Intelligent Heart, The Study of D. H. Lawrence, William Heinemann, 1930, p. 92.
4. Ibid., p. 93.
5. Jessie Chambers, D. H. Lawrence: A Personal Record, Tokyo, Aoyama, 1969, p. 65.
6. Moore, op. cit., p. 103.

III

1912年5月3日に人妻フリーダとヨーロッパへ駈落ちしたロレンスは、その年11月11日に「息子と恋人」(Sons and Lovers) を完成してゐる。The White Peacock では、登場人物にロレンスの生い立った周囲の人々を数々感じることができるが、それはあくまでも間接的に過ぎない。しかし Sons and Lovers その第1部、1章から6章は、はっきりロレンスの生い立ちを主とした、作者の自叙伝と見ることができる。

Sons and Lovers に出てくる the Bottoms は、ロレンスが2才の時に移り住んだ the Breach であり、Green Hill はthe Breach に来る前に住んでいた Victoria Street であり、Bestwood は実は Eastwood、炭坑主 Carston, Waite and Co. は実際には Barker Walker & Co. である。Selby and Nuttal は父親の働いていた Brinsley Colliery であり、Willey Farm は Hagg's Farm である。人物については、ロレンスの両親は Sons and Lovers の中では Mr. and Mrs. Morel として登場し、兄弟は実際には George, William, Emily, David (ロレンス自身), Ada といたのだが、Sons and Lovers の中では William, Annie, Paul, Arthur だけになっていて、Paul がロレンス自身である。初めロレンスの創作は、悉く初恋の人ジェシーに相談しながら行われたのであって、Sons and Lovers も最初はずっと書いてはジェシーに見せていた。そのジェシーはミリアム (Miriam) として登場する。その他1部においては、ロレンスの幼年、少年時代を取巻く人物が殆んどその儘の姿で描かれている。

Sons and Lovers の中でロレンスは母親のことを、"A rather small woman of delicate mould but resolute bearing……"¹ (からだつきは繊弱だが、きりっとした態度のどちらかといえば小柄の女) と言い、結婚後8年たったモレル夫人を、

She seemed so far away from her girlhood, she wondered if it were the same person walking heavily up the back garden of the Bottoms as had run so lightly on the breakwater at Sheerness ten years before.² (Sheerness はモレル夫人の父親が造船技師をしていた所)

彼女は娘時代とは余りにも遠くかけ離れた感じがした。彼女は谷底長屋の裏庭を引きずるようにして歩いている自分が、10年前シーヤネスの防波堤の上をあんなに身軽に駆けていた娘と同じ人かと自ら怪しむほどだった。

と述べている。小説中ロレンス自身であるポールについては、

Mrs. Morel looked down at him. She had dreaded this baby like a catastrophe, because of her feeling for her husband.³

モレル夫人はうつむいて赤ん坊を見た。彼女は夫に対する感情のためにこの赤ん坊の出産をまるで破局のように恐れていたのだった。

But she noticed the peculiar knitting of the baby's brows, and the peculiar heaviness of its eyes, as if it were trying to understand something that was pain. She felt, when she looked at her child's dark, brooding pupils, as if a burden were on her heart.⁴

しかし彼女はその児が一種特別な眉のしかめ方と、重そうな目をしているなと思った。それはまるでその児が何かこの世間の苦しさといったようなものを理解しようと努めているようにも見えた。彼女はその子の重い物思わしげな瞳を見る時、何だか彼女の心に重荷を背負っているような気がした。

とモレル夫人の悲しい結婚の運命の子として生れたことを示している。両親のどうにもな

らない性格の不一致。父親が酔って帰って来ては口論になり、モレル氏は乱暴を働く、しかしその後は “There was this deadlock of passion between them, and she was stronger”⁵（こうして彼等の間には感情上の開かずの錠前が下りていた。そして彼女の方が強かった。）やがてモレル夫人の愛情は夫に代って、完全に息子達に注がれることになる。

William occupied her chiefly. But when William went to Nottingham, and was not so much at home, the mother made a companion of Paul.⁶

主として母の心を占めているものはウィリアムであった。しかしウィリアムがノティンガムへ行って、あまり家になくなると、母はポールを選んだ。

ウィリアムがロンドンから帰って来た時、

For his mother there was an umbrella with gold on the pale handle. She kept it to her dying day, and would have lost anything than rather that.⁷

母親には白柄に金のついた傘だった。彼女はそれを死ぬ日まで大切に
して、何を失っても、それだけは失うまいとした。

母親の異状なまでに強烈な愛が息子に注がれて、感受性の強いポールは兄の不在とともに、次第に母の心を占めるようになり、“……in the end she shared almost everything with him without knowing”⁸（おしまいには、彼女は殆んどすべての苦勞を、知らず知らずのうちに、彼にもさせていた。）そして14才で学校を卒業、職を捜し始めた頃のポールは将来について、

His ambition, as far as this world's gear went, was quietly to earn his thirty or thirty-five shillings a week somewhere near home, and then, when his father died, have a cottage with his mother, paint and go out as he liked, and live happy ever after. That was his programme as far as doing things went.⁹

現在の社会組織では、彼の望みといえば、あまり家から遠くないところで、静かに一週30シリングなり35シリングなりを稼いで、それから父が亡くなれば、母と田舎にでも住んで画を描いたり、好きな時に出歩いたりして、幸福に一生を送ることだった。これが仕事に関する限りの彼のプログラムだった。

ポールと母親とが就職のために Bestwood に出かけた時 “The mother and son walked down Station Street, feeling the excitement of lovers having an adventure together”¹⁰（母と息子とは恋人同志が逢引でもするように、わくわくした気持で停車場通りを歩いて行った。）そしてやがて医療器具店に勤めるようになった頃、

Then he told her the budget of the day. His life story, like an Arabian Nights, was told night after night to his mother. It was almost as if it were her own life,¹¹

それから彼はその日のいろいろな出来事を母に話して聞かせた。こうしてポールは、アラビア夜話のように、毎晩毎晩、彼の生活物語を母に話して聞かせたので、母にしてみれば、それが殆んど自分自身の生活のように思えて来るのであった。

Everything he did was for her. She waited for his coming home in the evening, and then she unburdened herself of all she pondered, or of all that had occurred to her during the day. He sat and listened with his earnestness. The two shared lives.¹²

彼のすることは万事母のためだった。彼女は夜になると、彼の帰りを待っていて、彼女がいろいろと考えたことをすっかり彼に打明け、その日あったことをすっかり彼に話した。彼は坐って熱心に耳を傾けた。こうして二人は人生の喜憂をともにした。

此の様に母と息子の結びつきは次第に強いものになっていった。そしてこのモレル夫人とポールの異状なまでの母と息子の愛は、ウィリアムの死後いみじくもポールが肺炎に罹って、頻死の状態から母親の看病によって回復するに至って、より強烈な完全なものとなっていった。小説の中で叔母が言う “For somethings, it was a good thing Paul was ill that Christmas. I believe it saved his mother……Mrs. Morel’s life now rooted itself in Paul”¹³ (或る意味で、ポールがクリスマスに病気になったことはかえってよかったんだわ。私はそれが母の心を救ったんだと信じます。……モレル夫人の生活は、今やポールの中に根を下した。) こうして病後の体を養っている間に、母親同志が知り合いで行くようになった初恋の人ミリアムとの交際が始る。

ポールが “childhood” から “manhood” に成長するに及んで、他の愛を許さない程強烈な母の愛が完全にポールを支配している故に、ポールとミリアムとの恋愛は真直に発展することができない。ジェシー自身も A Personal Record の中で二人が月の出を待って浜辺を散歩している時、突然ロレンスが不機嫌になり “……he appeared to be in great distress of mind possibly also of body”¹⁴ そしてこうした場面は増々度を増して、その後続けて二度繰り返されたと述べている。ポールはミリアムといっしょにいる時、 “……his blood began to boil with her”¹⁵ でありながら “Once he threw the pencil in her face”¹⁶ と苛立ち、母親といてやっと、 “……he with all his soul’s intensity directing his pencil, could feel her warmth inside him like strength. They were very happy so, both uncounscious of it.”¹⁷ (鉛筆の運びに全精神力を集中している彼は、からだの中に彼女の温情を力と感ずることができた。二人共こうして非常に幸せであり、しかも二人共これを意識していないのだった。) 従ってその頃ポールは母親とミリアムの間にあって、

In contact with Miriam he gained insight; his vision went deeper. From his mother he drew the life-warmth, the strength to produce; Miriam urged this warmth into intensity like a white light.¹⁸

ミリアムと接していると眼が肥える。観察が深くなる。母からは生命

の温かみを一創作力を引き出した。この温かみを駆り立て、ミリアムが、白熱のような強さにするのであった。

ポールはミリアムとの愛に次第に燃えてゆくのであるが、モレル夫人は絶えずポールとミリアムの間を邪魔しようとし、又ポール自身も “……he could not harden his heart to ignore his mother”¹⁹ (母を無視するほど無慈悲にはなれなかった。) といったふうで、母の機嫌の悪くなるのをいつも気にしていた。又 “……this ‘purity’ prevented even their first love kiss”,²⁰ “You make me spiritual! And I don’t want to be spiritual”,²¹ “He felt she wanted the soul out of his body, and not him”²² (この「純情」のために二人は最初の愛の接吻すらできないでいるのだった。), (君は僕をとても精神的にするんだよ! だけど僕は精神的になりたくないんだ), (彼女は彼でなしに彼の魂を肉体から引抜いてしまいたいのだという気が彼にはした。) ミリアムとの余りに “spiritual” な愛に苦しみ、又その “spiritual” であることがポールに “I do like to talk to her……But I don’t love her”²³ (話しをするのが好きなんだよ……だけど愛してなんかいないよ) と言わせ、母親は “I can’t bear it. I could let another woman—but not her. She’d leave me no room, not a bit of room—”²⁴ (他の女ならともかく一あの娘だけは。あの娘がいてはおっかさん取りつくしまがないよ—とりつくしまが—) と抵抗して、結局は Moore も言っているように “Lawrence might have been able to love Jessie if she had been essentially different from his mother”²⁵ ということであった。母の邪魔に抵抗はしても、 “……yet somewhere in his soul, he was at peace because he still love his mother best. It was the bitter peace of resignation.”²⁶ (然し心の奥のどこかでは、自分はまだ母を一番愛しているのだと思って安心した。あきらめの苦しい安心だった。) こうしてミリアムとの恋は阻まれた儘で第1部は終る。

註

1. D. H. Lawrence, *Sons and Lovers*, ed. K. Doi & H Saji, Tokyo, Kenkyusha, 1968, p. 3.
2. *Ibid.*, p. 8.
3. *Ibid.*, p. 49.
4. *Ibid.*
5. *Ibid.*, p. 56.
6. *Ibid.*, p. 93.
7. *Ibid.*, p. 111.
8. *Ibid.*, p. 119.
9. *Ibid.*, pp. 120-121.
10. *Ibid.*, p. 125.
11. *Ibid.*, p. 153.
12. *Ibid.*, p. 156.
13. *Ibid.*, p. 190.
14. Chambers, *A Personal Record*, p. 49.
15. Lawrence, *op. cit.*, p. 211.
16. *Ibid.*
17. *Ibid.*, p. 213,
18. *Ibid.*
19. *Ibid.*, p. 217.
20. *Ibid.*, p. 241.
21. *Ibid.*, p. 254.
22. *Ibid.*, p. 216.
23. *Ibid.*, p. 285.
24. *Ibid.*, p. 286.
25. Moore, *The Intelligent Heart*, p. 103.
26. Lawrence, *op. cit.*, p. 289.

IV

第2部7章から15章は、内容そのものも事実とは異なる部分が多く、1部の自叙伝に対して「青年期の性慾を中心にした作者の自己心理学」¹とすることができる。

医療器具店は肺炎の後止め、回復してからはイーストウッドの小学校に助教師、イルケストーン教員養成所、ノッティンガム大学師範部卒業、正式の教員資格を取って、クロイドン(Croydon)で教師をしている1910年に母の死となるのであるが、その母の死までを書いた此の小説では、ポールは肺炎後もそのまま医療器具店に戻り、ずっとそこで働く。第2部でポールの“physical love”の女性として最も重要な人物クララ・ドーズ(Clara Dawes)については、妹Adaは架空の人物であると証明しているが、人妻である(別居中)点などは先にあげたMrs. Davidson、運動家であることは、ロレンスの友人の多くが進んだ考えの持ち主であったごとく、MooreはCroydon時代について述べている中で、“……in spiritual the Clara Dawes of the novel had much in common with Mrs. Dax”²であり“sexual”の面では、JessieがA Personal Recordに述べている、“He began to tell me that he could marry a girl of our acquaintance from a purely physical standpoint”³、“Then the theme of a physical marriage with X would drop up again……he had definitely come to conclusion he must marry X”⁴に各々類似を見ることができる。結局クロイドンを中心にした青年期のロレンスの周囲の女性から合成された創造人物であり、換言すれば、青年期のロレンスを取巻く、“spiritual love”(Miriam)、あらゆる愛を支配しようとする母親の愛、これ等に対抗するもう一つの“physical love”であり、ミリアム、母親以外のすべての女性の集大成として考えることができる。そこでいよいよ、家庭の事情から来る息子への母親の異状な愛、“spiritual”な愛、“physical”な愛、その間で大きく揺れ動き苦悩する青年ポールの姿を追ってみたい。

ジェシーはA Personal Recordの中でロレンスが“sex”に関して直接二回だけ論じたことがあると書いている。こうしてロレンスは性に目覚め、ジェシーとの恋愛に“sex”を求め、その衝動に襲われながらも、ジェシー自身も書いている様に、

He began to tell me that his feeling for me was entirely intellectual and spiritual, and had nothing to do with the physical side of life.

'It comes to this, you know,' he said. 'you have no sexual attraction at all, none whatever.'⁵

ジェシーを“spiritual”な女とみなしてしまっている。ロレンスは何度もジェシーに自分には二人の自分があると主張して“*For somethings I cannot without you. But the other side of me wants someone else, someone different*”⁶と言い、遂には“*a purely physical standpoint*”からある女性と結婚できると言い、交際も続いて、此の議論は数年間二人の間で続いたとジェシーは書いている。ロレンスはその当時、肉体的な恋愛をジェシーに感じながらも、最初から母親の強烈な支配で歪められていたこの恋に、本当のジェシーの姿を見ることができなかったのであろう。小説中ジェシーであるミリアムは“*This*

about not loving her physically, bodily, was a mere perversity on his part”⁷（肉体的に愛していないということはポールがただひねくれているだけのことである）と考え、*“spiritual”*なものだけでなく *“physical”* な愛も同時に、ポールのすべてを求めて、待っているのであるが、

She loved him first; he loved her first, and yet it was not enough. His new young life, so strong and imperious, was urged towards something else.⁸

母はポールを、ポールは母を、先ず第一に愛しているのだった。がそれだけでは物足りなかった。ポールの若々しい新しい生活は、熱烈で傲慢なものであって、何かそれ以外のものに向かって駆り立てられるのだった。

ポールの青春は、どうしても母親から離れてはばたかなければならない。それでも *“It was as if the pivot and pole of his life, from which he could not escape, was his mother.”*⁹（母がいわば彼の生活の枢軸と極だった。彼はそれから逃れることが出来ないのだった。）まだ魂は完全に母親に預けているのである。ポールはこんなミリアムとの関係では、どうしても母親から離れることはできない。夫と別居中のクララ（Mrs. Clara Dawes）を知るようになったポールは、一度はミリアムに訣別の手紙を書き、その中で *“May I speak of our old, worn love this last time”*（僕達の擦り減った古い恋の話をおを最後に話してもいいですか）と書き始め、次の様に言う。

You see, I can give you a spirit love, I have given it you this long, long time; but not embodied passion. See, you are a nun. I have given you what I would give a holy nun—as a mystic nun. Surely you esteem it best. Yet you regret—no, have regretted—the other. In all our relations no body enters.¹⁰

僕はあなたに霊的な恋愛は与えられます。今までずっと永い間そうして来ました。僕には肉体に具現された愛というものは与えられない。あなたは尼さんです。僕は丁度尼僧にでも与えるようなものをあなたに与えました——神秘的な修道院が神秘的な尼僧に与えるように。たしかにあなたはそれが一番値打があると思いました。それでいてあなたはもう一方のものに未練があるのです——いやあったのです。二人の間には「肉体」いうものはいって来ません。

This was the end of the first phase of Paul’s love affair. He was now about 23 years old, and, though still virgin, the sex instinct that Miriam had over-refined for so long now grew particularly strong. Often, as he talked to Clara Dawes, came that thickening and quickening of his blood, that peculiar concentration in the breast, as if something were alive there, a new self or a new center of consciousness, warning him sooner or later he would have to ask one woman or another.¹¹

以上がポールの恋愛事件の第一期の終りである。彼は23才だった。まだ童貞だが、ミリアムによって永いことあまりにも上品にされ過ぎていた性の衝動が特別に激しくなって来た。クララと話していると、血が濃くなり、流動が速くなる。胸のあたりが妙に引きしまってくる——まるで胸の中に何か生きものでもいるようだ。新しい自我と言おうか、新しい意識の中心と言おうか、それが早晚お前も誰か女がほしくなるにちがいないと警告するのだった。

ポールは“physical”, “sexual”な愛へと大きく飛躍して行く。ポールはクララにミリアムのことを“Wants the soul out of my body. I can't help shrinking back from her……I know she wants a sort of soul union”¹²（僕の肉体から魂だけがほしいんです。だから自然僕はミリアムを避けずにはいられないんだ……わかりますとも！ミリアムは一種の魂の交りを求めているんだ）と言うと、クララは“And you haven't found out the very first thing about her……That she doesn't want any of your soul communion. That's your own imagination. She wants you.”¹³（それである人の一番根本的なものがまだわからないのね……魂の交わりなんか求めているってことよ。そんなものはあなたの想像よ。あなたって人を求めているのよ）と言う。やがてポールは又ミリアムのところへ頻繁に通うようになり、自由を求めて母への抵抗は大きくなり、“I shall come home when I like, I am old enough”¹⁴（僕は自分の好きな時に帰ってきますよ。いつまでも子供じゃないんだから）と母親に自分の行動を説明しなくなり、母と彼の間は冷たくなっていった。母親は“If he had made up his mind nothing on earth would alter him. Mrs. Morel was tired. She began to give up at last; she had finished. She was in the way.”¹⁵（もし彼が一旦こうと決めたら、金輪際思い直させるわけには行かなかった。母の方がへたばってきた。彼女は締めるほかない気がし出した。彼女はもう用なしだ。むしろ邪魔物だった。）こうして発展するかの様に見えたミリアムとの関係は、いざ肉体の交りを持つとする時、

She was very quiet, very calm. She only realized that she was doing something to him. He could hardly bear it. She lay to be sacrificed for him because she loved him so much. And he had to sacrifice her……

And afterwards he loved her —— loved her to the last fibre of his being. He loved her. But he wanted to, somehow, to cry. There was something he could not bear for her sake.¹⁶

彼女は非常に落着いて静かにしていた。彼女には彼のために何かを尽しているのだという考えがあるだけだった。彼にはそれが堪えられなかった。彼女は彼を深く愛するが故に彼のために犠牲となって横たわっていたのだ。そして彼は彼女を犠牲にしなければならなかった……そしてその後で彼は彼女を愛した——彼の生命の最後の細胞に至るまで彼女を愛した。しかし彼はなぜともなく泣きたい気がした。何かしら彼女のために堪え難いものがあった。

いかに愛していても“sacrifice”としてさし出されたミリアムをポールは“……she gave no living warmth”¹⁷（彼女はなんら生きた熱情を与えなかった）と言って、ミリアムとの“physical love”は失敗に終る。“spiritual”には自由を求めて、母親とも冷くなっている時、お互いに自由になろうと言うポールにミリアムは、“a reasonable child”¹⁸（駄々っ子）と思い、“You are a child of four.”¹⁹（あなたは四つの赤ちゃんだわ）と言うと、ポールは心の中で“I don’t want another mother”²⁰（僕は二人もお母さんはいらないよ）と言って、結局二人の愛はしばらく跡絶えてしまう。

この後ポールとクララの関係はどんどん進んで、結婚を考える迄になる。だが此の場合ポールは“physical love”だけを求めているのである。それはある程度母親の愛と両立することができたからであった。故にモレル夫人は言う、“Yes, I like her. But you’ll tire of her, my son; you know you will.”²¹（えゝ好きよ。でもお前はあの人がいやになるよ。自分でもわかっているだろう。）今では母親に話すことのできないことが多くなり、“He had a life apart from her—his sexual life. The rest she still kept.”²²（母とは別個の生活—性的方面の生活がある。その他の生活はまだ母の知っている生活である）、しかしこうした愛の形の方が、他の女性の愛の介入を許さない強烈な母親の愛ともかなりうまく行ったのである。だがクララ自身はポールに“physical love”だけでないものを求めて来る。その時“physical love”だけを考えていたポールは言う、

When she is there, as a rule, I do love her. Sometimes, when I see her just as the woman, I love her, mother, but then, when she talks and criticizes, I often don’t listen to her.²³

そばにいる時は、大抵はほんとに愛している。時々、ただの女だと思っている時は愛するんだよ。でもあの人（クララ）が口を利いたり批評したりしだすと、ちっとも聴いてやらないことがよくあるんだよ。

“physical love”だけでなくもっと“spiritual”なものも求めていたクララは、

She had not got him, she was not satisfied. She had been there, but she had not gripped the——the something——she knew not what——which she was mad to have.²⁴

彼女はまだ彼をしっかりとつかんでいなかった。だから不満だった。自分（クララ）がその場にいても、何か—それがなんであるかわからなかったが—何かむしう（クララ）に手に入れたいと思うものをしっかりとつかんでいなかった。

“spiritual love”に欠けたポールも、

It seemed almost as if he had known the baptism of fire passion, and it left him at rest. But it was no Clara. It was something that happened because of her, but it was not her.²⁵

彼は情熱の中で火の洗礼を知ったような気持ちになり、それが彼を安らかな気持ちにした。しかし、それはクララではなかった。それはクララによって起ったあるものではあったが、それはクララではなかった。やがてクララはより多く自分を必要としている夫の元へ帰って行き、ポールの“physical”だけを求めた恋愛は又も失敗に終る。

ポールとミリアムの仲はしばらく絶えていたにもかかわらず、母親の重い病いが続き、不安のうちに彷徨っていた折、ミリアムの優しい手紙にポールはミリアムに会いに行く。再び自分の所に戻って来てくれたポールを、ミリアムは“physical love”で慰めようとする。しかし、その時は、

And she kissed him and fingered his body, till at last, feeling he would go mad, he got away from her. It was not that he wanted just then—not that.²⁶

彼女は彼に接吻し、彼のからだを指で撫でていた。彼は我を失いそうになったので、彼女から体を離れた。それは、この時彼が望んでいるものではなかった——それではなかった。

こうして常に“physical love”と“spiritual love”との不一致で、ポールの恋愛は常に失敗に終らざるを得ない。

いよいよ母親の死期がやって来て、母と息子の異状な愛もクライマックスにくる。

実際にはロレンスは母親の死後肺炎に罹ってクロイドンの学校を辞めなければならなくなっている。ポールのそれまでの人生のあらゆる支えであった母親の死によって、ポールの自我は完全に解体に向う。“He wanted to get away from himself, but there was nothing to get hold of. In despair he thought of Miriam”²⁷（彼は自分自身から逃げ出したかった。しかし外に頼りにするものがない。絶望のあまり彼はミリアムのことを考えた。）しかし又もミリアムとの出会いにおいて“……you love me so much, you want to put me in your pocket. And I should die there smothered.”²⁸（君は僕を愛するあまり、僕を君の自由にしたいんだ。そんなことをされちゃ、僕は窒息して死んでしまうだろう。）と言い、“He was thinking of his mother, and had forgotten Miriam…… Her sacrifice, then, was useless.”²⁹（彼は亡くなった母のことを考えていた。そしてミリアムのことを忘れていた……これじゃ彼女が自らを犠牲にしたところでなんにもならない。）結局ポールは過去のあらゆる愛を絶ち切って、小説 Sons and Lovers は次の様に結ばれている。

“Mother!” he whispered — “mother!”

She was the only thing that held him up, himself, amid all this. And she was gone, intermingled herself. He wanted her to touch him, have him alongside with her.

But no, he would not give in. Turning sharply, he walked towards the city’s gold phosphorescence. His fists were shut, his mouth set fast. He would not take that direction, to the darkness, to follow her. He walked towards the faintly humming, glowing town, quickly.³⁰

「お母さん！」彼はすすり泣くように言った——「お母さん！」

こうした中であっても、母こそは彼を支えてくれるただ一つのものであった。そしてその母がどこかへ紛れて行ってしまったのだ。彼は母の手に触れてほしかった。母に連れて行って貰いたかった。

いや、それではならぬ。彼はへばってしまいたくなかった。彼は身をひるがえすと、町の黄色いきつね火の方へ向って歩きはじめた。彼は拳を握りしめ、口を固く結んでいた。彼は母の後を追って闇の方へ行きたくなかったのだ。彼はかすかに騒音のきこえる明るい町の方へ足早に歩いて行った。

このポールこそ、妹 Ada も言っているごとく、*“Like Paul Morel his youth ended in Sons and Lovers……He must find new life and new ways of living”*³¹

ミリアムとの *“spiritual love”*、クララとの *“physical love”* に失敗、さらに強い支え、母親を失っても、人妻フリーダとの出会いにおいて、ロレンスが述べている次の様な言葉が示すごとく、*“……I like a gushing girl……the finest woman I’ve ever met……she’s splendid, she is really.”*³², *“It’s a funny thing to feel one’s passion——sex desire——no longer a sort of wandering thing but steady and calm. I think, when one loves, one’s very sex passion becomes calm, a steady sort of force, instead of a storm.”*³³. ロレンスはそれまで別々三人の女性から求めていた総てのものを、フリーダ一人の女性の中に求め、見出ししたのであった。Moore の言う *“He sees that life is good, but he is without the sentimental illusion that life and love may be enjoy without pain.”*³⁴ ということであって、初めて異状な母親の愛に歪められていた青年期の総決算を、Sons and Lovers を上記の様に結ぶことによって成し遂げ、本当の新しい両性関係へと、作品においても発展して行くことができたのである。

註

1. 三宅幾三郎、清野暢一郎訳、息子と恋人、東京、角川文庫、1964、p. 259.
2. Moore, The Intelligent Heart, p. 95.
3. Chambers, A Personal Record, p. 61.
4. Ibid., p. 76.
5. Ibid., p. 55.
6. Ibid., p. 58.
7. Lawrence, Sons and Lovers, p. 298.
8. Ibid., p. 299.
9. Ibid.,
10. Ibid., p. 337.
11. Ibid., p. 338.
12. Ibid., pp. 371-372
13. Ibid., p. 372.
14. Ibid., p. 375.
15. Ibid., p. 376.
16. Ibid., pp. 388-389.
17. Ibid., p. 393.
18. Ibid., p. 396.
19. Ibid., p. 397.
20. Ibid.
21. Ibid., p. 441.
22. Ibid., p. 462.
23. Ibid., p. 470.
24. Ibid., p. 475.
25. Ibid.
26. Ibid., p. 524.
27. Ibid., p. 552.
28. Ibid., p. 558.
29. Ibid., p. 524.
30. Ibid., p. 562.
31. Ada Lawrence, Young Lorenzo, p. 60.
32. Moore, op. cit., p.119.
33. Ibid., p. 122.
34. Ibid.

参 考 文 献

- D. H. Lawrence, The White Peacock, Penguin Books, 1961.
D. H. Lawrence, The Trespasser, Penguin Books, 1961.
D. H. Lawrence, Sons and Lovers, Penguin Books, 1959.
D. H. Lawrence, Selected Poems, Penguin Books, 1965.
D. H. Lawrence, Selected Letters, Penguin Books, 1961.
D. H. Lawrence, Selectd Essays, Penguin Books, 1965.
Moore, Harry T., The Intelligent Heart, The Study of D. H. Lawrence, William Heinemann, 1930.
Potter, Stephen, D. H. Lawrence, A First Study, New York, Jonathan & Harrison Smith, 1930.
Lawrence, Ada & Gelder, G. Stuart, Young Lorenzo, Early Life of D. H. Lawrence, Tokyo, Asahi Press, 1968.
Chambers, Jessie, D. H. Lawrence : A Personal Record, Tokyo, Aoyama, 1969.
土居 光知 註訳 Sons and Lovers 研究社 1968
佐治 秀寿
三宅幾三郎 訳 息子と恋人 角川文庫 1964
清野暢一郎
伊藤 整 訳 息子と恋人 河出書房 1969
村岡 勇 D. H. ロレンス・テーマと研究 研究社 1966
中橋 一夫 ロレンス 研究社 1965
ケネス・ヤング (瀬尾裕訳) 英文ハンドブッカー 「作家と作品」。
ロレンス 研究社 1965